



Keio University
1858
CALAMVS
GLADIO
FORTIOR



田中亮三名誉教授講義（2006年10月21日）

<司会>

ただいまより、慶應義塾創立150年記念田中亮三名誉教授講義を開催いたします。本日は三田キャンパスにお越しいただき、誠に有難うございます。お蔭様で慶應義塾は2008年に創立150年を迎えることとなります。これもひとえにたくさんの皆様のご支援の賜物であると、心より感謝申し上げます。

本日の講義は、創立150年を記念いたしまして、「復活！慶應義塾の名講義」と題して、長く義塾において教鞭をとられた先生がたに、改めて感謝いたし、その意を表するために、慶應義塾のキャンパスにお戻りいただき講義を行っていただくというものでございます。また、先生にご指導いただいたたくさんの塾員、関係者の皆様にはご卒業後も発展を続けている慶應義塾の姿をご覧いただくとともに、懐かしい恩師の講義を受講していただくことで、改めて学問の素晴らしさを感じ取っていただきたいという企画でございます。本日は、広く一般の方にもご案内させていただいておりますが、先ほどご説明いたしました趣旨による講義となりますので、若干塾員向け、ご卒業生向けの内容となるかもしれませんが、ご了承のほど、よろしく願いいたします。また、今後の広報のために、講義風景をカメラで撮影をさせていただきます。その中で一部、ご出席されている皆様のお顔が入る可能性がございます。予めご了承くださいませ。また、開始時刻の関係で講義の途中、チャイムがなってしまいます。大変申し訳ございません。このチャイムは終了のチャイムではございませんので、あわせてご了承くださいませ。

さて、本日の講義でございます。「創立百年の頃：三田山上の巨匠たち」というテーマで慶應義塾大学法学部の田中亮三名誉教授にご講義いただきます。田中先生は、昭和32年に本塾大学文学部英文学科をご卒業、昭和35年まで高等学校教諭を勤められました。その後文学研究科修士課程を修了、法学部助手、専任講師、助教授を経て、昭和54年から平成12年まで法学部教授として教鞭をとられました。それでは田中先生、どうぞよろしくお願いいたします。

<田中先生講義「創立百年の頃：三田山上の巨匠たち」>

今日はこの秋でも最も素晴らしい、暑くもなく寒くもなく行楽日和の日、この貴重な土曜日、私の拙い話のためにお出ましいたできて、大変恐縮に存じます。また、実際今日は、私よりも先輩がたくさんみえていまして、こんなつもりじゃなかったんですけれども、ちょうど来月に、私の次のこのシリーズの講義をしてくださる伊丹先生までおいでくださったり、私はちょっと話ができるかなと思って、それまでは何でもなかったんですけど、ここのところちょっと心配で。

ここでいう、「三田山上の巨匠たち」という題は、要するに、昭和32年に私は卒業し、翌33年が義塾の創立100年であったわけでございます。それで大体その時期にどういう先生がたがいらっしゃったかを考えてみると、今の若手の先生がたのことを私はあまりよく分からないせいもあるんですけれども、ものすごい方がたに我々は教えていただいていたんだということを、今、つくづく感じております。

義塾の名声は非常に高くなっておりまして、そして学生の、いわゆる偏差値的な水準からいいますと、私どもの学生時代よりはずっと、そういう数値は上がっているんじゃないかと思えます。我々の時代には国立の一流の大学との差が、多分、大分あったんじゃないかと思えますけれども、今日、おそらくは、ほとんどない状況だと思います。実際に私も学生に、5年ぐらい前までは塾の教室で教えておりましたが、そのときにも、随分良く出来る学生が増えたなという感じがいたしましたし、非常にみんな真面目によく勉強するように。そういう意味では大変嬉しく思っております。私の学生時代というのは、そん



Keio University
1858
CALAMVS
GLADIO
FORTIOR



KEIO 150
Design the Future

2008年、創立150年を迎えます。

なに学生の質が高かったわけでもないし、特に私は文学部の学生で、文学部というのは、あんまり男が行くところではないというふうに、まあ、今でも思われているかもしれないけれども、思われていた。で、一貫教育の普通部とか高校から上がって参ります場合、一番希望が少ないのが文学部だったわけですね。で、「文まわし」という言葉がありまして、文学部で我慢すれば、進学させてやるよということできた人たちが随分いた。でも、その人たちがみんな悪かったわけじゃなくて、大変面白い人たちがいて、我々はとても知らないようなことをたくさん知っていますし、それはそれで我々の生活を非常に豊かにしてくれたことは事実でございます。

昨日私がここに参りまして、この教室に入ってちょっとこの機材などを見ておりました。そうしましたら、全くこの教室変わってない、というのは、もちろん、窓がアルミサッシになったりしていますが、それは鉄の枠でございました。天井は張り替えたりして、もちろんエアコンなんか夢のまた夢。そういうことはございますけれども、基本的には、この黒板なんかは同じ黒板でございます。今、大体黒板を使うところなんかなくて、ホワイトボードにフェルトペンで書いているのに、ここは未だにチョークかなんかで書いているわけですが。で、この教室で何を、どういう授業を受けたかといいますと、フランス文学の白井浩司先生、まだその頃は助教授でいらしたんじゃないかと思えますけれども、フランス文学史の講義をここでしておられました。それからそのときに、もう名誉教授になっておられました、小林澄兄先生って、教育学の大家がいらっしゃる。小林先生は小泉信三先生と同級生で仲が良かったという方。そういう長老の先生の講義を、私はその辺で一所懸命聴いていたという記憶がございます、それがもう、考えてみると半世紀以上前になっております。で、ずっとこの周辺を歩いておられますと、色んなことを思い出すわけでございます。ちょっと最初に、もちろんこの塾出身の方ばかりじゃいらっしゃいませんし、うんと若い方なんか、あまりご興味ないかもしれませんが、ちょっとあの昔の三田とか日吉が、どういうところだったか簡単にスライドショーで、最初に見ていただくと、古い方は昔に戻るんじゃないかという感じがいたします。

(スライドショー)

1 枚目；今、最初に、この坂はおそらく私ども、あるいはもう少し先輩の方々には大変懐かしいんじゃないかと。これは明治時代の写真でももちろん私が知っているわけではないんですが、基本的には昭和 30 年代の初めぐらいまでは、ほとんど変わっていませんでした。もちろんあの門は、幻の門っていう鉄のものに変わってしまっていたのですが、左方にちょっと蔵の壁みたいなものが見えております。あれは我々のころは、そのままにありました。右方には郵便局があったんですが、もちろん正面に旧図書館が見えたわけでございます。

2 枚目；これは、私どもは話だけ聞く、大ホールという、今 500 番台の教室があるところでございますね。あそこに我々のときには卒業まで瓦礫のまんまでございました。何もなかった。それは戦争中空襲で破壊されたそのまま、ほんとに瓦礫の山になっておりましたけれども、それがいわゆる大ホールという講堂だったわけでございますね。ここに福澤先生の肖像が架かっていて、持ち出せなくてついに焼けてしまったんだそうです。色んなことがございましたが、これが話聞く大ホールというところでございます。

3 枚目；こういうゴシックスタイルのものですね。

4 枚目；これはちょうど創建当時の図書館。これは創立 50 年の記念に建ったわけでございます、これは曾祢・中条建築事務所の建築で、この、今、皆さんが座っていらっしゃるこの建物が、我々の頃は新館と言っていて、今、第一校舎と呼ばれております。これも曾祢・中条建築事務所的设计でございます。それから塾監局、そこにちょっと見えております塾監局というのがございますが、これも曾祢・中条で



すから、たいへん曾根・中条建築事務所の作品が多いのであります。次の、
5 枚目；これをご覧になると、空襲でこういう姿になって、私はこの姿は知らないんでございますが、
こういう状態になったんですね。今、国の指定の重要文化財になっていますが、
6 枚目；もちろんこれはご覧になれる現在の姿ですね。これは大変いい建物で、いわゆる復興ゴシック
様式でございませぬ。
7 枚目；これは古い卒業生の方、懐かしいんじゃないでしょうか。学生ホールと言ったところで、今の、
このちょうど突き当たりぐらいのところの木造の2階建ての、こういう建物が非常に多かった。という
のは、これは谷口吉郎先生の作品。戦後も、三田は壊滅状態ですから、その中で、乏しい材料をやっと
工面して、木を繋いだりして非常に苦勞してやられたものでございませぬ。こういうふうなものがたくさ
んございませぬ。その中の一つでたいへん有名なのが
8 枚目；この猪熊弦一郎先生の壁画ですね。今も、完全な形ではございませぬけれども残っております。
9 枚目；これはどこかと言いますと、丁度この背中の辺りに今、新研究室というブロックがございま
すけれども、そここのところにこれは、当時大学院棟といていたような気がするんでございませぬが、これ
も谷口先生の設計で、木造でございませぬ。私ももここで授業を受けたことがございませぬ。特に大学院
のときはこの2階でもってそれこそ西脇順三郎先生の時間なんかここでもって聴いた。ところがここ
は床も木でございませぬので、歩くところが音がするんです、相当遠慮しても、ですから一つの教室で
授業が終わりますと、もうそれで他の教室はほとんど授業ができないような状態。大体この手の教室は
そうだったんですけど、とにかくこういうところがございませぬ。これが1階。
10 枚目；これもそうですね。それから、
11 枚目；これはもちろん言わずと知れた演説館。これは昔の演説館。今と同じなんですけど、場所がい
ま、塾監局という建物がございませぬが、ちょうど正面、見えております、あの塾監局の位置にこの演説
館があったんだそうでございませぬ。
12 枚目；これは第二研究室。先年非常に世間で話題になりました、このノグチルームを救えというこ
でもって、色んなジャーナリズムでも随分騒がれました、これを壊すな、保存しろということは随分。
私もその保存の方に名を連ねた一人なんですけれども、これも谷口先生の作品。で、向こうに、左手に
見えております、奥の所にあるのが、イサム・ノグチが石や何かを配置しまして、部屋の中の設計をし
て、外側にイサム・ノグチの彫刻もございませぬけれども、今はもう高いビルに建替えられて、これは
3階か4階にこのノグチルームだけを、なるべく昔の姿に移築してそこに置いてございませぬ。これは無
いよりは私はいいと思うんですけども、まあ、建物っていうのは本来の場所に本来の機能で置かれる
べきものであって、あんまり嬉しくはございませぬけれども、こういう、非常に懐かしい。ここは懐か
しいのは、伊丹先生なんかよくご存知だと思いますけれども、我々も指導を受けた先生方がみんなこ
こにいらっしやって、私も卒業の前に卒論だとか修士論文の時の面接は、この先生の研究室へ行って伺
うわけです。そうすると私が大学院のときは、西脇順三郎先生の、最後の弟子になるわけなんですけども、
そのときは先生が、「どこいったかな…」と、こう、探して、「ああ、これだ」とか、私の論文をパンパ
ンとこう埃を払って、ちょっと見て、「まあ、ええでしょう」とか言って。(一同、笑い) それだけであ
ります。絶対に読んでいらっしやらないと思う。お読みになったらとても私は通していただけなかつた。
13 枚目；これはノグチルームでございませぬ。真ん中にこのちょっと、何て言いますか、暖炉がござい
まして、この椅子や何かも、椅子とか向こうの台になっているところ全部、イサム・ノグチの設計で
ございませぬ。で、この椅子の背中に縄が巻いてございませぬ。この縄の巻き方がイサム・ノグチが気に入
らなくて、最後にここに入れたときに、徹夜で谷口先生が巻き直したという、建築の大家がこれを徹夜



でもって巻き直したというお話をあとで伺いましたけれども。

14 枚目；これは今、右方に見えているのがいわゆる新館、さっきあの2階建ての大学院校舎なんかがあったところが、今、こういう建物(新研究室)が建っております。今、私どもがおりますのは左方にある昔の新館、今の第一校舎でございます。

15 枚目；これは塾監局ですね。塾監局は、軒のところをご覧になると、いわゆるバトルメントと言う狭間があります。これも復興ゴシック様式でございます。たいへん良い建物なんですけれども、塾の連中はあんまり評価をしていません。でも、私はもう一回見直してもいいんじゃないかと思っています。

16 枚目；ここでちょっと日吉に移りまして、日吉の坂を上がってまいりますと、坂を上りきった右方に、今、高等学校の校舎になっております、第一校舎と申しますけれども、こう円柱が並んでいる新古典様式風の建物も、曾祢・中条建築事務所の作品でございます。

17 枚目；これはその西面でございます。あそこにちょっと世界地図みたいな模様をあしらった壺みたいなものが見えておりますけれども、これは丁度、大東亜共栄圏なんていわれた東アジア、東南アジア、南太平洋地域を表したもののようございまして、下のところへちょっとなんか銅版があったのをはずしちゃってありますが、この銅版がどこへいつちやったのか、私は非常に気になっているのでございます。というのは、曾祢・中条建築事務所のは、みんな年号が西暦ではなくて皇紀、例えば 2600 年というのが昭和 15 年でございますか、全部皇紀で書いてあるんです。これはどこへいってもそうなんですね。例えば熱海の旧岩崎邸に行きまして、はっと見たら、やっぱり皇紀でもって記してあるんで、私はその当時の校長に、「あれ一体どうした」って言うと、どうしたか分からないって言うから、

18 枚目；「冗談じゃないよ」って、怒ったことあるんです。で、これは丁度その反対側、第一校舎の対面にあります第二校舎。これは私どもの頃、自然科学系統の、今でもそうじゃないかと思うんですが、自然科学系統の教室が入っております。もともとは、今の理工学部の前身の藤原工大の建物として建てられたものだと思います。

19 枚目；これは今日この中に何人か、大変懐かしいと思われる方がいらっしゃると思います。日吉にチャペルというものがございます。これはキリスト教とは全く関係のない慶應義塾にチャペルというものが存在するというのは、ほとんどの方がご存じないと思いますけれども、これは慶應のキリスト教青年会のもので、ただ戦後進駐軍と言われたアメリカ軍に接收されましたので、その間に日吉の建物、ここも含めて非常に荒らされてしまったんで、割合に最近またかなりな手直しをしたんですが、こういうものがございます。これより先に行きますと

20 枚目；通称イタリア半島と言われております部分に、これはぼろぼろになっておりますけれども寄宿舎があるんですね。これも谷口先生の作品。今までに散々、塾は建物を壊しましたけれども、これだけはちょっと最後に、壊すどころか、もう一回昔の姿に戻して欲しいと言っています。そういう運動を、ちょっと今からでは間に合わないかもしれませんが、とにかくやりたいと思っております。

21 枚目；今のは、北の棟で、これが中央棟といいましょうか。あそこに高い煙突が見えておりますが、あの下に、

22 枚目；ちょっとこれ、円形のものが見えております。これですね、ローマ風呂という大浴場がありまして、その先は谷になる。ここがこの台地の一番端になるんです。ですから今はもうごちゃごちゃ家で埋め尽くされてしまいましたけれども、昔、これができました頃は実に壮大な眺望が開けて、お風呂に入りながら一と向こうまでつづく優雅な田園風景を楽しめた。これは東洋一といわれた建物だったんですけれども、今はもう見る影もございません。だけどこれは是非もう一度復元して欲しいと思っております。そんなことでちょっと昔に戻って見ていただいたわけでございます。



Keio University
1858
CALAMVS
GLADIO
FORTIOR



KEIO 150
Design the Future

2008年、創立150年を迎えます。

今、私がここに昭和32年当時の教職員名簿のコピーを持っております。見てみるとやっぱりすごい。私は文学部だったんで、文学部の系統の先生しかあんまり直接にはお世話になっておりませんが、あとでご覧になりたい方があったら、是非、ご覧下さったらいいと思います。

例えば経済学部、この間、現経済学部長塩澤修平さんに会って、あの頃は確か学部長が藤林敬三先生じゃないかなと言ったら、「へえー、すごい昔のことですね」、なんて言われたんですが、そうですね、人口問題だと寺尾琢磨、野村兼太郎、高村象平、この方は後に塾長をやられた方ですが、千種義人、町田儀一郎なんていう方もいらっしゃるし、そういうことで、千種義人先生、この方は後に商学部、私が卒業した年、32年に商学部が発足するわけで、千種先生とかあるいは、小高康雄先生なんかが。後に色々私どもは存じ上げている、例えば加藤寛さんなんかは、当時まだ助教授でいらしたのかな。言っていると、きりがないのでこれまでにいたしますけれども。

それで私は直接ご指導いただいた先生方というのももちろんこの中に、現にお元気な方もいらっしゃいますし、もう殆どはいらっしゃらない方なんですが、実はさっき中庭の看板を家内が見ていましたら、私の恩師が実際に、今日その中のプリントにもございます方が、別のところで話をしているらしいので、これはまずいときにぶつかっちゃったなと思って、非常に困っているわけでございます。まず、私ども、私が一番印象に残っているといひましようか、「警咳に接する」という言葉がございますけれども、実際に警咳に接した方としては、西脇順三郎先生、この方は詩人として大変な方でございますので、名前ぐらいは皆様ご存知でいらっしゃると思います。もちろん、先週の新日曜美術館のアートシーンの一番最後のところで、今年の春亡くなった飯田善国という彫刻家の回顧展の紹介がございまして、その中でもって詩人の西脇順三郎と組んで、詩画集クロマトポイエマ(三田評論2007年1月号表紙参照)を出したとありました。いろんなことで西脇先生は多面的に活躍をなさっている。

西脇さんという方は大詩人であるんですけども、新潟の出身で、新潟の訛りといひましようか、特有の音が一部、最後まで抜けなかった。ですから、イングリッシュがエングリッシュって。英語がちょっと「いいご」になったりするんです。小千谷のご出身で。西脇家っていうのは、小千谷では名家でございまして、今渋谷の西武デパートが2棟ありましてそのB館の方、ハチ公広場から遠い方の角あたりに、西脇銀行の支店があったんだというふうに先生は言ってらっしゃいました。その、ですから、非常に豊かな家庭でお育ちになった。そして好きなように勉強なされた。中学のとき、語学が好きで非常に夢中で語学をやったと言っているらしいです。それで後に文学者としても活躍なさることになったんだと思ひま。小さいときから非常に絵が好きで、絵をよくお描きになったということで、中学を出たら画家になろうと思ったんだと言っているらしいです。これもやっぱり大変なことで、上京してなんと藤島武二さんのところへ行って絵を習う。それから黒田清輝なんかも訪ねていらっしやいますね。しかしまあ途中でもって家庭の事情もお変わりになった、お父様が亡くなられたりしたせいもあるんでしょうけれども、それでまあやっぱり絵描きじゃ食えないといけないからというんで、実業をやろうということになって、もう一度ここ慶應義塾大学の理財科、今の経済学部ですね、に入られた。そして小泉信三さんに師事し、で、これがなんと、我々のころの伝説だったんですが、卒業論文をラテン語で書いたというんですね。これ、まさかと思つたんで、先生に直接僕は伺つてみて、「ほんとにお書きになったんですね。しかも、ラテン語でもって2枚とか3枚あったっていうことが伝説になっておりまして、ほんとにそうですか」って言ったら、「ラテン語では書いたけれど、2、3枚っていうことはないよ」って。もう少したくさん書いたんだというふうに言ってらっしゃいましたけれども、とにかく学部の学生がラテン語で書くというのは、大変なことだったんだと思ひます。



Keio University
1858
CALAMVS
GLADIO
FORTIOR



KEIO 150
Design the Future

2008年、創立150年を迎えます。

で、慶應義塾の予科の教員をやられたんですけれども、それから義塾派遣の留学生として、オックスフォード大学に留学をなさる。この時代に短篇なんかで面白い作品を書いていた、ジョン・コリアーという作家がおりますけれども、そのジョン・コリアーなんかと付き合いがあったという。で、西脇さんの『薔薇物語』という詩の中に、「十月に僕は大学へ行くことになってジョンは地獄へ行った」という一節があるんですね。このジョンっていうのはジョン・コリアーのことなんだそうです。そういう色々な人物との付き合いがあった。で、この時代に、オックスフォード大学で、非常にアカデミックな英文学の勉強をなさったんですね。当時慶應義塾の文学部っていうのは、たいへん有名な作家や詩人が揃っていたわけですから、そこに集う人達っていうのは、みんな文学青年であって、英語とか英文学なんてのはどうでもよくて、むしろ、自分達は文学青年だっていう気負いの方が強くて、そういう空気があった。例えば、野口米次郎、さっきのイサム・ノグチのお父さんですけれども、や、文化学院の戸川エマさんの尊父戸川秋骨なんかが教員でおられたわけですから、その雰囲気はどうもあんまりアカデミックでなかったんですね。西脇さんが帰ってこられて、オックスフォードできちっと勉強なさったオーソドックスな英文学のやり方というものを、そのまま塾において行った。従ってその前からいた方がたは、非常に居心地が悪くなって、段々と辞めざるをえなくなったという話を聞いたことがございますけれども。それ以来義塾の英文科というのは非常にオーソドックスな教育をするようになって、今でも多分そうなんだろうと思いますけれども、例えば私どもの時には、厨川文夫先生、この方をご承知の通り厨川白村のご息にあられる。で、この先生は非常に学問には厳しい方。我々も非常に大学院のときなんか、先生の授業がほとんどだったんですけれども、古代中世英語を読んでいく。中世のチャウサー(Chaucer)なんていうのはまだいいんですが、”ベオウルフ(Beowulf)”とか、『アングロサクソン年代記』のような古代英語というのは、今の英語とは全く違うんですね。しいて言えばドイツ語に近いかなと思うようなものなんだけれども、これは2行ぐらい読みますのに一晩かかるぐらい大変なんです。一語一語専門の辞書を引いて、格がいろいろございますのでそれをあわせて読み解いていく。で、格のある言語というのは主語やなんか省いても、動詞の形だけで分かりますから、今の英語みたいに主語・動詞が必ず出てくるなんていうものじゃあないので、それでこう、頭と尻尾を合わせて解いていくのに大変な苦勞をいたしましたけれども。それを実に厳格に、ちょっと間違えると、それは違うんだと言って、徹底的に教えていただくんです。そういうオーソドックスな英語、英文学の勉強の仕方っていうのを、厨川先生は西脇直伝でおやりになった。西脇さんは色々なものを日本語に翻訳していらっしゃる。「カンタベリー物語」なんかもそうなんですが、厨川先生は、箇所によってはあまり嬉しくない。「まあ、西脇さんはとってても文学的な方だから面白ければいいって言うんだけど、このところはちょっとどうですかね」なんていうことをよく言われていました。しかし面白いということは、とってても西脇さんにとっては大事なことであったわけで、ただあの、私ども英文科の学生として、この中にも何人か私の同級生がおられるんですけれども、「君たち英文科の学生なんかいうのは、英語の教師になるっていうのは勤め口としては一番広いんだ」と。で、「英語の教師になるためには、英語の教師の素養と資格を備えなくちゃいけない」ということで、非常にそういう基礎的な英文法だとか、発音の原則を非常にきちんと教えられたんですね。そして、「素人でも結構大工仕事があるんだけど、大工と素人の違いっていうのは足場が渡れたり、鉋が研げるかどうかということ。で、君達英文科の学生はやっぱ鉋を研げて足場を渡れなくちゃいけないんだ」ということを言われた。これは非常に分かりやすい表現なんですね。色々言われるより。で、まさになるほどということ、学部のごく普通の学生にもそういう何でもない英語を非常に一所懸命教えられたということです。そういう初歩的な教育を若手の教員に任せておくということではなくて、例えば慶應外国語学校、慶應外語って今



Keio University
1858
CALAMVS
GLADIO
FORTIOR



KEIO 150
Design the Future

2008年、創立150年を迎えます。

でもあると思いますが、当時はそのへんの木造の校舎の中にあっただけですけど、そこでもって夜、一般の人たちも来て、英作文の時間なんていうのがあって、西脇大先生がそこに出て、英作文をお教えるんです。お教えるといっても、ただ、非常にいい例文をずっと見せて、「とにかくいい英語を覚えなきゃだめだ」と。これは非常に勉強になりますし、私もとても能力としては低いんですけども、いい英語をたくさん覚えるっていうことがとても大事なんで、特に書く場合なんかはそうであります。そういうことでもって、英語の教師としての自覚ってものをきちっとしていなくちゃいけないということを非常にしっかりと教えてくださったように思います。

西脇さんの詩をずっと私もこの間からまた読み直しているんですが、詩の話は詩人とか詩の専門家にお任せすることにいたしまして、西脇の詩っていうのは、なんかちょっと全然よく分からないんです。わかんないっていうのは普通に見たって何を言っているんだかよく分からない。例えばここに、三田文学の名作選の中に一つ、大正15年に書かれた「体裁のいい景色」って詩がございます。「人間時代の遺留品」という副題がついております。体裁のいい景色なんてものが、景色が体裁がいいか悪いかなんて普通、あんまりこういう形容詞は使わないんで、その詩の冒頭に、「やっぱり脳髄は寂しい。実に進歩しない物品である。」とあるんですね。脳髄という言葉は先生、お好きだったとみえまして、他にも使っていらっしゃるんですよ。それからその次に、「湖畔になるべく簡単な時計を据え付けてから、俺は俺の Panama 帽子の下で、さかんにしゃべってみても、割合に面白くない。」この割合っていう言葉は、西脇さん、お好きだったんで割合によくお使いになるんですね。(一同笑い) あっ、出てきたなと思ったんですけども。で、やっぱり脳髄、これはあとでもって西脇全集っていうのが出ましたとき、後ろにご自分のことを書かれた部分がありまして、その全集の後書き、「脳髄の日記」っていうんですね。脳髄っていうのは大変好きな言葉だったんじゃないかと思えますけれども。詩をずっと見ていきますと、たいへんたくさん植物の名前が出てくる。で、先生、植物が大変好きだったんですね。というのは、ちょうど我々の学生時代は白金の八芳園のところにお住まいだったんですが、そこからバスで多分三田までいらっしゃる。途中で魚籃坂下のところで降りてしまわれるんですね。降りて、じゃあどうなさるかという、それからずっと歩いて三田までいらっしゃる。その間、ただ歩くじゃなくて、こう道端を見て、この頃赤瀬川原平さんたちが「路上観察」なんてものを盛んにやっていますけれども、先生のはまさに「路傍観察」。で、当時はまだ道端にどぶや側溝があった時代ですから、そこに雑草なんか生えてる。そうすると先生はしゃがみこんでその雑草を一所懸命観察しておられるんですね。何をやっているんだろうなと思いつつ、僕はバスで別のルートですけど、同じところを通ると先生、一所懸命その、道端でもってじっと草を眺めておられる。ですから雑草の色々な名前を非常によくご存知で、「赤のまんま」、赤のまんまっていうのはどういうものか、私よく分からないけれども、そういうような色々な雑草の名前がいっぱいこの詩の中にちりばめられております。

それで、まとまらない話でございますけれども、西脇さんは非常に外国語っていうのが好きで外国のこともよく勉強なさって、よくこんなに色々なことをご存知だなあと。インドの「バガバドギータ」なんていうものまで読んでいらしたりします。ただ、日本語っていうのがあんまりお得意じゃない、いわゆる一般に我々がいうような常識的な日本語の表現をあんまりお使いになるのが得意じゃないんですね。ですから、ちょっと、例えば夜、私もちょっとお供して飲みに行ったりして、どっかおでん屋かなんかで飯を食う。そういうときにお米のご飯が出ますと、「ぼかあ(僕は)、この米が独立しているのが好きなんだ。」って言うんですね。米が独立するなんてことはね、普通の表現じゃないわけで、「先生、そういうのは、ぱらっと炊けてるとかなんとかいうのが普通じゃないですか。」って言ったら、「そうかねえ。でもとにかく僕は独立しているのが好きだ」って言う。それ式の表現が非常に面白い。普段の西



Keio University
1858
CALAMVS
GLADIO
FORTIOR



KEIO 150
Design the Future

2008年、創立150年を迎えます。

脇さんの顔、私は、この慶應義塾はあんまり「先生」ということを、特に文学部はそうだったと思いませんけれども、先生というのをつけて呼ばないのは、別に福澤しか呼ばないというわけじゃなくて、そういう非常に自由といいますか、雰囲気があったんですね。ですから、我々も、さすがに先生に向かって西脇さんとは言わなかったけれども、大体西脇さんと言っていたものですし、ですからつい西脇さんと言っちゃうんですが、まあとにかく浮世離れしたところがある。で、大学院に私が入りましたときに、私は3年遅れて大学院へ行ったわけですが、そのとき、後に女優になった、今でも女優だけど、村松英子さんっていう方が日本女子大を出て慶應の大学院に来て、T. S. エリオットの詩劇の研究をするっていうんで来られたわけですが、彼女が、さっきの大学院の校舎の2階で一緒に授業、まあせいぜい4、5人だったと思いますけれども、西脇さんのなんか授業があつて、そうしたら、西脇さんが入ってこられたら村松さんがくすっと笑ったんですね。で、「どうしたの？」って言ったら、「西脇先生って面白い方ね。」「そりゃあ面白いよ。どうして？」ってきいたら、日本女子大にも教えにいらして、その時西脇先生、教室に入ってこられたらそのまんま窓のところに行って、外をずーっと眺めて5分くらい全然こっち見ない。黙ってらっしゃる。やがて「この学校は女の先生が多いねえ。」って、しばらくしてからはっとして、「ああ女子大か。」って。(一同笑い) それはもう、いかにも西脇的でした。

私は大学院へ行ったのは、学部終わってから高校の英語教師を3年やって、もう自分が勉強したことを出し尽くしちゃったから、もう少し勉強したいと思ったんですね。そのときは、一所懸命そう思って、もう結婚して子どもも生まれるころだったんですね。思い切って家内に打ち明けて、大学院、行ってもいいかって。まあ若いっていうのは無鉄砲で素晴らしいことで、どうなるかわからないけれど、とにかくやってみようというんで、辞職して大学院へ入ったわけですが、そのときにやっぱり実際に私が勉強家でないのがよくわかったのは、勉強したいと思って大学院へ行ったんですけど、なんていうのかな、やっぱり行ってみると何とか手を抜く方法はないかと一所懸命考えるわけですね。(一同笑い) でもまあ、厨川先生の授業なんか、非常に辛かったんですね。そのときやっぱり我々の仲間、みんなおんなじように遅れて入ってきたんですけど、5人ぐらいの仲間が、みんなやっぱりどっかで手を抜きたい、サボりたい。そしたら一人の男が南校舎の教室、今でもあるところですが、3階か4階に英文科の研究室がございまして、そこで授業があつて、西脇先生が来られた。ちょうど秋で日本シリーズをやっているときだったんですね。そうしたら、一人の男が、「先生、今日、日本シリーズなんですけど。」っていったら「それなあに。そこでやってんの。」と、その中庭を指して。(一同笑い) その南校舎のエレベーターも、先生は絶対にエレベーターにお乗りにならなかった。必ず4階ぐらいまで階段を上っていらっしゃるんですね。それも健康のためにはいいんだけど、で、「どうしてお乗りにならないのですか。」っていったら「いや、歩くほうがかえってええんです。」とかね。ただ。あるとき先輩に聞いたら、いや、最初のときにね、1階でもってエレベーターにお乗りになった。で、ボタンを押さないわけですよ、どこも。だから入って、ドアは自然に閉まる。そのまんま、たまたま他に乗る人がいなかったから、(一同笑い) かなり長い時間、先生はその箱の中に閉じ込められて、どうやったら開けられるのかとか、どうやったら出られる、そんなこと全然お分かりにならないから、そこへしばらくおられたんですね。たまたま次に乗る人がいたから助かったんでしょうけれども。それ以来、絶対にエレベーターにはお乗りにならなかったですね。そういうことがございました。

それで非常に記憶のいい方だったから細かいことでも非常によく覚えていらっしゃるんですね。それでこれもどこか飲みに行くのにお供したときの話なんですけれども、どこだったか忘れちゃったけれどもとにかくどっかのバーでもってそこに座っていた女の人に、「僕は君に会ったことがあるよ。」で、そ



の女性の方はそんなことすっかり忘れちゃってるわけですよ。で、そんな偉い先生だっていうことも向こうは知らない。ぽかーんとして「えっ？」っていうような顔をしている。「君はこの伊皿子の花屋の脇の路地の奥の枝折り戸を開けて入る家だろ？」って言ったら、「その通りです。」「僕はそこへ送っていったことがあるよ。」(一同笑い)これにはみんな大笑いしたんです。そういう記憶は非常にいい方なんです。で、もちろんその、そういうようなのはたくさんあるんですけども、これはいっぺん、檀ふみさんに今度話す機会があったら話そうと思ったんですけども、詩人の佐藤春夫さんが亡くなられて一周忌のときだったんでしょうか、三回忌だったか忘れちゃったけど、とにかくなんかご法事があった。門弟三千って、たくさんお弟子さんがいらっしやるんですね。その中の一人に作家の檀一雄さんがおられた。佐藤春夫さんのご息子の佐藤方哉(まさや)君っていうのが我々と同期で慶應に、彼の方が一つ年上ですけども、心理学の教授をやっていたんです。彼は教育大の附属から医学部へ行くつもりで医進コースに入ったんですね。ところが1年でやめちゃって文学部移った。春夫先生は非常になさったんだらうと思いますけれども、まあとにかく。で、方哉君と一緒に渋谷のいわゆる待合という料亭に流れた。同行した私の友達から電話がかかってきて、今、こういうわけでここにいるからっていうんで、そこへ伺ったんです。そうしたら檀一雄さんっていう方は本当に素晴らしい魅力のある方なんですけれども、私が行きましたら、座布団から降りて、「檀と申します。」って両手をつけて深々とお辞儀をなさるんですね。方哉君、さっきまでは西脇さんも一緒だったって言うから、ああ、じゃあ、西脇さん呼んでこようよって言って私は先生のところへ電話して、「実はこういうことで佐藤方哉君と檀さんといらるんですけど」って言ったら、「いやあ、それは佐藤さんのことだったら私は行かないわけにはいかない。」って言って、私は代々木八幡のお宅までお迎えに行きましてね。それでお連れした。そうしたら、また例によって檀さんは座布団から下りて「檀と申します。」っていうふうに丁寧にこう。(お辞儀の真似をなさる)。そうしたら、なんと西脇さん、「あなた、団伊能さんのご一族ですか。」(一同笑い)これはほんとのダン違いっていうやつで。その程度に、現代のいわゆる通俗作家みたいなものは全然ご存じないんですね。そういうところは本当に浮世離れしたところがあって、あれは大変面白かったんですが。そういう場所でもってときどき見えていますと、先生、かなりおばあさんの芸者さんなんか見て、「この女なんかいうのは澁井清の好みだねえ。」って、「こんど澁井連れてこようよ。」って言って、また澁井さん呼んだこともありまして。そう言えば、今ここにいる同級生の大久保利泰(としひろ)君からその澁井清の名前がこの前に出たよね。ああそうか、澁井さんは我々の時代日本近世美術史教えておられたんですね。私は教わらなかったんですが、あとで浮世絵の話色々伺ったことがある。

やがてやっぱり酔っ払って、酔っ払ってって私が酔っ払ったんじゃなくて先生が酔っ払って、目黒川の川っぺりのところにある澁井邸へ、夜遅く伺ったこともありまして。

ところで、先生は飲み屋の女性なんかでも非常に顔立ちがはっきりしている女の顔がお好きなんです。ね。「彼女なんかは僕の好みですよ。」で、「この人は男顔だ。」って言うんですね。「はっきりいって。つくりがはっきりしていて男顔。僕の顔なんかいうのは女顔なんです。女顔の人間っていうのは大体男顔が好きで、逆もまたそうなんだ。」ということで、なるほどね、先生ってご自分の顔をそういうふうに見ていらっしやるんだなあと思ったことがございます。

世間のことには全く無頓着でいらっしやるんだけど、そういうことが全然気にならないかというところでもないんですね。言うことはほんとのことでなくちゃいけないということをよくおっしゃった。例えば、全集かなんかお出しになるとき、前に書かれた詩を見直さなくちゃならない、もう一回見直して、「将棋を打つ」っていう表現があった。これは西脇先生が多分将棋も碁もなさらなかったんだと思いますけれども、「将棋を打つ」っていう表現をなさった。そうしたらその編集者に「先生、将棋は指



Keio University
1858
CALAMVS
GLADIO
FORTIOR



KEIO 150
Design the Future

2008年、創立150年を迎えます。

すんじゃないですか。」って言われたんで、直しました。「でも将棋を打つって、先生、面白いじゃないですか」って言ったら「それは、それはだめです。」って。そういう表現はないっていうのは使っちゃいけない。ですから、あるとき、色々なことをお話しているときに、面白きやあいいっていうものではないんだと。先生の、さっきからちょこっと読んでおまして何かこう、変なところに脳髓が出てきたりなんかする。これはあの、普通これは我々常識的な人間には考えられないような結び付きですね。これはあの、先生からよく言われた、ディスコルディア・コンコルド(discordia concordo)、「遠いものの連結」というふうにおっしゃっていたけれども、結びつかないようなもの、調和していないようなものを結びつけることの面白さ。これはまあ現代詩っていうのはみんなそうなのだと思いますけれども、T.S.エリオットなんかもそうだと思いますが、ディスコルディア・コンコルドっていうこと。ですから、何か面白いとんでもない結びつき、しかしそれが嘘になっちゃいけないっていうんですね。例えばこういうのを書いてきた人がいたんだけど、それはだめだと僕は言ったんだと。「外へ出てみたら、空がなかった」っていう。ちょっと面白そうなんですけど、それはあり得ないことだからだめだっていうんですね。そんなことは、外へ出れば空はあるんでね、そういうないことは書いちゃいけません。それは嘘だ。全くそういう世間のことには恬淡として何もお感じにならない先生ではいらっしゃるんですけども、時々びっくりするようなこと、こちらは慣れてるからあんまりびっくりしなかったんだけど、「君達東大なんかいってもあんまり馬鹿にしちゃいけませんよ。東大にもできる人はいる。」(一同笑い)これはあの、あとで、鍵谷幸信なんて人が週刊誌に書いていたけれど、それは私も直接伺ったことがあるんですが、それはほんとにそう思ってる部分だってある、当時の東大っていうのは、市河 三喜さんとか斎藤勇(さいとうたけし)とか有名なのは英文学、日本の英文学界では有名な人だった。だけどそういう人達の業績っていうのはそんなに先生は評価してらっしゃらなかったんですね。それは確かにそうなんだけれども、しかし若手の中にはできるのもいるよということ。ただね、じゃあ東大というのを見下していたかというとは決してそうじゃない。っていうのは、先生はオクスフォードへ留学なさったんですね。オクスフォード、ケンブリッジと比べる。すると「オクスフォードなんかいうのはまあ東大みたいなもので、ケンブリッジは慶應みたいなものだ」っていうんですね。ってのは、そのところで自分のいたオクスフォードの方が格が一つ上だというふうに言われているわけなんで、ちょっとその、「東大なんかいっても馬鹿にしちゃいけません」っていうのと、ちょっとこれ矛盾しているんですけども、本当の意識の中にはそういうのがおありになったんじゃないかなっていう感じがしますね。それから、これはまあ弟子たち、みんなよく知っていることなんだけれども、先生が日本学術会議の会員におなりになったとき、かなりこの、弟子どもがその票を集めるんで駆け回ったようです。もう私より上の世代の人だから私は全然関係ないんですけども。ということをお聞きしました。そんなことはもうどうでもいいとお思いになっているのかと思うとそうでもない。だから文化勲章の問題がありまして、文化功労賞は先生はお貰いになっている。そうしたら、先生はもう文化勲章をお貰いになってもいいじゃないですかなんて聞いた馬鹿な奴がいたんですけども、そうしたら、「いや、あんなものはきたから断りました。」という。いや断ったって、文化功労賞はお貰いになっているんだから、そんなことはないはずなんだけれども。(一同笑い)そういうのはちょっと体裁が悪いからそうおっしゃるけれども、そういうことに全く関心がおありにならなかったというのではないんですね。だけどそれは大変俗っぽい、非常に人間的な部分である。

さっき申し上げたように、自然というものにたいへんに関心がおありで、植物なんかお好きなんですけれども、西脇邸へ伺うといつでも必ず先生はきちっと上着を着て、ネクタイをしめておられるわけですね。私が行くからとかじゃなくて、急に行っちゃってそう。私が行くからって別に正装をなさる必要は



Keio University
1858
CALAMVS
GLADIO
FORTIOR



KEIO 150
Design the Future

2008年、創立150年を迎えます。

ないんだけど、いつでもどうもそうみたいで、それで行けばまあとかいってウイスキーが出てきて水割りを飲んだりなんかする。代々木八幡のお家を、土地をお買いになってお家をお建てになったときに、「僕は、庭なんかはむしろコンクリート敷き詰めて、こう水で洗えるようなそういう庭が好きなんですよ。」っておっしゃるんですね。なるほど、やがて代々木八幡のお宅が出来上がって行ってみたら、やっぱりそういうお庭なんですね。いろいろこう低木があってカケヒヤツクパイがあるような日本的な庭園では決してない。非常にこう、むしろ抽象的な庭園。だからそういうところはどういう結び付きがあるのか私はついに分かりませんでしたけれども。でも最終的に、最終講義というのがありまして、その時に、その518番教室、大きなところでやっていたんですが、「私は最近洛陽に興味を持つようになった」と。要するに先生はずっと殆どはどちらかというと西洋の、あるいはオリエントの古代文化からずっと西洋文明ということにほとんど目を向けていらしたんだけど、晩年になってやっと東洋に回帰してくるっていうことがおありになったようで、最終的にはやっぱり生まれ故郷の小千谷がいいということで、一番最後は、寝込まれてから病院車で小千谷へお帰りになって小千谷で亡くなられたんですけれども、やはり人間の回帰というのはいかになされるかわからないけれども、やっぱり東洋人としての西脇順三郎、最初は全然日本語で詩を書かなくて英語で書いておられて、やがて日本語で書かれるようになった。そして最終的にはやはり日本人であって日本人の西脇順三郎で生涯を終えられたんだなという感じがいたします。で、西脇さんのことばかり話しましたが、この、皆さんにお配りしたプリントの2枚目のところに井筒俊彦という方がいらっしゃいまして、これは大変長いリストになっておりますけれども、この方は世界的なイスラム学者、大変な頭脳だったと思いますね。私は井筒先生の講義しか聞いたことがないのでありますけれども、これは非常に楽しみだった。何が出てくるかわからないんですね、とにかくすごい。井筒さんは一体何ヶ国語おできになったかよくわからないんだけど、大体4週間から8週間あると、一つの言語をマスター、マスターっていうのは要するに読み書き、しゃべるところまでできちゃうという。どういうふうになさるかという、この方、お金持ちだったんでしょうね、井筒薬粧の息子さんだったから。いわゆる、我々が若いとき、井筒ポマードというのがございましたけれども、そこのお家だったんですね。この方はもともとは経済学かなんかやろうと思ったんですけど、やっぱり途中から西脇順三郎に惹かれて、そして文学に転向する。これは池田弥三郎さんと同期だったんですね。で、二人で、もう一人どなたか、誰だったろう、ちょっと忘れちゃいましたけれども、予科から本科になるときに経済をやめて文学部に転科した。その時数寄屋橋の上からみんなが経済学部の教科書を川へ放り投げということを、どっかに池田さんが書いておられる。

この井筒先生はとにかく語学、言語だけではなくて色々思想的なこと、それから非常に抽象的な哲学みたいなものにまで非常に多岐にわたって造詣の深い方。一つの言語を習得しようと思うと一部屋に閉じこもって、その、要するにネイティブスピーカーですね。そのネイティブスピーカーと一緒に連れてその部屋へ入って、その間日本語を一切使わずに全部一つの言語でもって徹底的にやる。その間、流動食を食べて、固いものは食べないで消化の良いものを食べて、ずーっとこもりきりにする。4週間ぐらい経つと大体それで一つの言語が習得できる。あるとき慶應外語にここでポーランド語をやっていないでしょうかと、ポーランド語を習いたいという音楽家かなんかが来られて、そうしたら、ちょっとポーランド語はここではやっていません、で、その話を井筒さんにしたら、「ああ、そう。一月待つてくれたら僕、やってもいいよ。」と。(一同笑い)と言われたっていうんで、あとで聞いていかにも先生らしいし、だけど本当にそうやって何ヶ国語もお出来になる。その愛弟子の鈴木孝夫先生。今日、実はそこで別の会で話をしているから、ちょっと僕は非常に具合が悪いなと思っているんですが、鈴木孝夫さんっていうのは、私やそこらへんにいる同級生はみんなあんまりいい思い出がない。(少々笑



Keio University
1858
CALAMVS
GLADIO
FORTIOR



KEIO 150
Design the Future

2008年、創立150年を迎えます。

い) 非常に皮肉の多い人なんで、全然、齒に衣を着せぬっていうのはあの方のことなんで。で、随分傷ついた若い人達が多い。しかし、ものすごい頭のいい人。もともとは医学部へいくつもりだったんだけど途中から転向して文学を、文学をやって、言語学っていうか、社会、言語社会学ですね。おやりになって、どんどんどんどん新しいものに向かわれる。非常にこの、常識的な視点を離れた、視点を變えて物を見るといことが、ぱっと切り替えてお出来になる方で、これはすごい人なんです。まあ、鈴木孝夫さんなんかはもちろん井筒さんを非常に尊敬して非常にその影響を受けられた方だと思う。

こういう井筒先生。私もやっぱりバスで渋谷から来るとき、井筒先生が前に座っていらっしゃる。そうするとじーっとこうバスに座っていらっしゃるとき、かなり頭の大きい方なんです。だからやっぱり脳みそがいっぱい入っているんだろと思うんですけども、あの頭の中でこの瞬間何を考えておられるんだろと思うことがよくあったんですが、我々凡人はぼやっとしているけれども、おそらくその間、井筒さんの頭の中っていうのはかなり活発に活動して、何か色々なものを分析しているんじゃないかなと感じたことがございます。

とにかくイスラム学で、「僕は井筒さんの講義を聞いたことがある」というと今の若い人は、「わあ羨ましいな」という人がたくさんおられるんです。

それから私が敬愛した方で、池田潔先生って方が。この方は学者として非常に有名ということではなくて、むしろ戦後、随筆家として非常に有名な方でした。実は私ここにぼろぼろになった岩波新書を持っています。これは何かというと、『自由と規律』という本であります。これは、この頃(1949年)、本を買うのがとっても大変だったんですよ。池田さんの本が出るなんていうと前の晩から、今、ゲームソフトかなんか、前の晩から大型電気店の前に並ぶなんて若い人がいるようだけれども、当時は本を買うためにずっと長時間並んだりしたんです。私の母親が私に読ませようと思って母親の字でもって昭和24年12月、で、私の名前が書いてありますけれども、これが実は見たら初版なんです。11月5日第1刷発行という。これはもう私は何べん読んだか。ちょっとぼろぼろになって表紙が半分ちぎれて、色も変わったりしていますけれども。今、この間ちょっとインターネットで見えておりましたら、これはやっぱり英国人を知ろうと思ってこれ以上の本はありませんっていうような感想をもっている人の書き込みがありました。その人は第33刷を読みまして書いています。この本は一時絶版になっていたんですけども、先生が亡くなられてからまた復刊して、今も出ております。池田先生のエッセーはまさに戦後、良識の手本みたいにしてみんなが読んだものです。これらは小泉信三先生が非常に高く評価されて、この出版も小泉信三先生に勧められてやったんだということを、小泉さんご自身がこの本の序文に書いておられますけれども、要するに1920年代の初めですね。たまたま池田先生は麻布中学の4年を終えてイギリスのリーズスクール(Leys School)っていうパブリックスクール、いわゆる寄宿制の私立中学へ行かれた。麻布中学っていうのは私の母校でもありますので、私の先輩でもある。私が高校生の頃に池田先生、私の学校へ来て話をしてくれた。校長が非常に傾倒していたものですから、それでお呼びをして話をさせていただいたんだと思いますけれども。私が慶應の英文科へ行くようになったのも、一つにはその影響がなかったわけではないですけども。

この方が、まず、イギリス人はどういうふうにかという、実に今までイギリス人とかイギリスについてものを書いた人、たくさんございますし、割合に最近では、林望君が「イギリスはおいしい」なんて書いたりして、あの本もなかなかいい本ですけども、池田先生の、本当のイギリス人のもっているスピリットみたいなものをいまだに、これ以上に書いた人はいないと思います。それでいまだにイギリス人を知ろうと思ったら、イギリス精神を知ろうと思ったら、それはイギリスも表面的には随分変わっておりますけれども、根源にあるイギリスのいわゆる指導階級っていうんでしょうか、



イギリスを引っ張っている階層の人達の一番中心になっている考え方とか感じ方というものを、実によく表している。

それから非常に文章の達者な方なんです。この方はイギリスのリーズスクールを出てからケンブリッジ大学へ進まれて英文学をやられて、そのあと、ドイツへ行ってハイデルベルク大学に留学。ですから高等教育、殆ど外国で受けていらっしゃるんで、日本語があんまりできないはずなだけけれども、非常に日本語の上手な方。ご自分でも書いていらっしゃるけれども、小さいときから新聞が好きで、新聞を端から端まで読んだ。で、当時の新聞っていうのは今の新聞と違まして、美文調で格調の高い文体。それをずっと暗記するぐらい読んでいたんです。「全部私の文章はそこが基本なんだ」というふうに。まあそれだけじゃなくて、文章のセンスがおありになったんだと思いますが、とにかく素晴らしいエッセイストであった。

この先生が、私は学部的一年、二年それから三年、ほとんどずっと学部を通じて、最初は語学を教わった。そのときの教科書がこれで、” Good-bye, Mr. Chips” (「チップス先生さようなら」)という。これもその当時私が、昭和 28 年のときに使った教科書、いまだに持っていて、もう色が変わっておりますけれども。これは池田先生の何年かリーズスクールの先輩のジェイムズ・ヒルトン (James Hilton) という作家の、これは大傑作ですね。ヒルトンの作品はいくつかあるんですけども、これを凌ぐものは僕はないと思います。非常に短いものなんです。これは教科書版でたった何、100 ページもないんですよ。85 ページ。これを実は池田先生は私の学部的一年のときと二年のとき、2 年かけておやりになったんですね。これはすごいことなんで、私も教師やってる間にいっぺん、これを使ってやってみたいと思ったけれど、とても自信がなくてできませんでした。とにかくこの中でももちろんこれをやりながら色々話をしてくださるんですけども、それは結局その話の方が非常に多い。けどもここでもってこのチップス先生っていうのは、パブリックスクールという寄宿学校の教師をずーっとやって、そして引退してその学校の道を隔てた向かい側の、その学校の鐘が聞こえるところでもって晩年を送る。その老人の話なんです。これがこの、リーススクールというのが、私はどこにあるんだかあまり気にしていなかった。後に、1973 年から 75 年まで私はケンブリッジ大学に留学いたしましたので、そのときに、実は自分の所属しているコレッジから歩いて 10 分ぐらいでしょうかね。10 分ぐらいのところにはリーススクールというのがあるというのを知ったんですけども、実はそれを全然知らなかった。大阪の方のある大学の先生が、僕が慶應だと言ったら、池田さんに習ったかっていう話になりました。「私は池田先生の『自由と規律』があんまりよかったんで、あの中で色々なものを読んで、そしてリーススクールへ訪ねて行って、嘘だったんだけど、私は池田先生の弟子だと言って、いろいろ話をきいたんです」と言う。実は私の方が本当の弟子だったんですけども。(一同笑い) 実はそのとき初めて私はそのケンブリッジのごく近いところにそのリーススクールという学校があることを知りまして、わたくしも訪ねて行った。実はそのとき私の借りておりました家の家主さんがやっぱりリーススクールの出身で、あとで分かったんですけども。リーススクールへ、多分家内も一緒に訪ねて、丁度お茶の時間で、COMMON ROOM でもって先生方がお茶を飲んでいらして、そうしたら「私の恩師がリーススクールの出身だ。」「いつごろですか」って、「1920 年代。22 年から 3 年、そのくらい。」そうしたら、「あ、その頃の先生ならいますよ。」そうしたら、忘れもしない、ジョン・スターランドっていう先生なんですけれども、老人です、そのときもう、80 過ぎておられたと思いますけれども、その先生がおられて、「お前は池田を知っているそうだな。」っていうから、「ええ、私は長い間教わってました。」「池田は元気か。」って「はい。」「池田はもう結婚してるか。」「結婚してるかってお孫さんがいますよ。」(一同笑い) で、「池田はどっちの」、って、ご兄弟がおられて、「どっちの池田だ」っていうから、「お兄さんの方だ。」



Keio University
1858
CALAMVS
GLADIO
FORTIOR



KEIO 150
Design the Future

2008年、創立150年を迎えます。

そうしたら、「じゃあ弟はなんか戦争で死んだと聞いたけれども、それは敵兵に殺されたのか、それとも病気で死んだのか」っていうから、「戦争が終わってから中国大陸で病気でもって亡くなられたということです。」そうしたら「今度池田に会ったら、よろしく言うておくれ。」そのジョン・スターランド先生っていうのは、やっぱりずーっとリーズで教えておられて、そして引退して、まさに通り一つ隔てたところに引退なさって、毎日お茶の時間になるとコモンルームへ来てみんな、後輩の教員たちとお茶を飲んでおられるわけですね。まさにこのチップス先生(Mr. Chips)という老先生と同じ生活、同じパターンで、びっくりしました。帰ってきてたまたま大家さんに会ったんで「今日はリーズに行ってきた」といったら、「あ、リーズって僕の学校だよ。」っていうから、「ああ、そう。ジョン・スターランドっていう先生」「あいつ、まだ生きてるの。」って。僕がいるとき、もうその大家さんっていう人は引退している、僕よりずっと年が上の人でしたけど、引退している方。「僕がいたときにはもう相当じじいだったんだけど。」っていう。だけどまさにその、そういうのがイギリスのパブリックスクール。この小説は映画にもなりまして、ちょっと昨日その映画の昔のビデオを見たんですが、グリア・ガースンという女優が昔おりまして、それがチップス先生の奥さんのキャスリーン役をやって、今、ビデオが出ておりますけれども、それからそのあと、今から30年以上経っちゃいましたね、ペトゥラ・クラークっていうギリシャ出身の女優でミュージカルシンガーがいますね。それと誰だっけな、男の方はアラビアのロレンスなんかやったあの俳優。(会場から声がかかる) ああ、ピーター・オトゥールですね。ピーター・オトゥールがチップス先生をやって、これはミュージカル仕立てでしたけれども、非常に面白い。それから割合に最近、最近って一昨年くらいにまた、これはテレビ版でもってまた作られて、それはそれで面白かったんですけども、色々その時代によって解釈が違ってきておりますけれども。この、「Good-bye, Mr. Chips」っていうのは、いまだに不朽の名作ということになっております。これ、イギリス式のジョークの言い方っていうのが、これをずっと見ていらっしやると、ちょっとただの駄洒落じゃなくて、なかなかこの、いいジョークがたくさん出てくるんですね。これも大変勉強になったわけでございます。

このリーズスクールのことを私の家内が大変一所懸命調べておりまして、実はこのチャペルの100周年、ここにはたくさん日本の初期の留学生が行っているものですから、ごく一週間くらい前のことです、ここの100周年の記念の行事がありまして、家内が招待されてわざわざそのためにイギリスまで出かけて行って、昨日帰ってきたんですが、そこには日本の人達が、要するに日本の近代化に大きな貢献をした先覚者たちが随分ここで教育を受けております。ところが家内がずっと色々な記録を調べている中に、池田先生の弟豊さんがよく出てくるんですよ。なのに池田潔先生は全然出てこない。これはどういうわけだろうと思ったんだけど、池田さんっていう方はおそらくラグビーをなさらなかったっていうか、あまり運動が得意じゃなかったんですね。だから運動がお得意じゃなかったからどうもあんまりああいう生活はお好きじゃなかったんだ。それから後にずっと一生涯、先生はもう一度イギリスへ行こうっていうことをなさらなかったのは、何か理由があったのかなあという気がしますが、そこらへんはもう今、伺うわけにはいかないのですけど。とにかく大変私もお世話になったので、大変印象深いのは、大学院のとき、英作文という授業がありました。とったのは私一人だったんです。で、一对一の授業ですね。こんなに贅沢なことはなかったと思いますけれども。私はレポート用紙3枚ぐらい、最初は何か題を出してくださったんですけども、そのうち自分で勝手に書いてきなさいと言われてまして、一週間かかって書いていくわけですね、英文で。そうするとそれを先生がご覧になって、(手で直す仕草をなさる)これはもう5分もかからないでしょう。で、「ここはちょっとこういうふうに表現を変えた方がいいかもしれない。」とおっしゃるけれども別にそれがいいとか悪いとかおっしゃらない。それから、そ



Keio University
1858
CALAMVS
GLADIO
FORTIOR



KEIO 150
Design the Future

2008年、創立150年を迎えます。

れが終わってからず一っとおしゃべり。それをず一っとうかがって、で、終わると私はたまたまちっちゃな車で通っていたものですから、私は渋谷だし、先生のところは渋谷の神山町だから、「先生、お宅までお送りします。」っていうと、「あ、じゃあ。」っていつて。「僕もこの頃また車を運転しようと思って習っているんだよ。」って。「イギリスにいた頃やったんだけど、僕がやった頃はギアが車体の外側についているやつだった」って言うんですね。もちろんセルモーターなんてないから前いつて、こうやってブルンブルンとかける、そういうような車を散々乗ったんだけど、しばらく乗っていないけれども。それからやがて免許をお取りになって乗っていらっしやっみたい。で、私の運転している横にお乗りになるから、「先生それはまずいですよ」っていつたら、「いやあ僕は今運転習っているところだから、ちょっと横に乗せてよ」っていう。それからまたお宅へ伺うと非常に上等なパンとかハムなんかが出てきて、奥様もいらして色々お話を聞かせてくださる。ですから教室ばかりでなくて、お宅でもって僕は随分色々教えていただいた。これは大変有難いことで、大変幸せだったと思います。

その他もっと色々お話することはあるのですが、時間になりましたのでこの辺で切り上げさせていただきます。話がまとまらないところ、大変申し訳ございませんけれども、最後ちょっと谷口吉郎という名前、ページが5とふってありますけれども、これはこの方は別に塾の先輩でもなんでもない。ただ、さっきから申し上げましたように、木造の建物は、それから幼稚舎ですね、幼稚舎の建物。それからさっきの寄宿舎が谷口先生の作品です。幼稚舎が一番最初なんですけど、あれを造られたとき、非常に実験的な、あの、窓なんか、普通のただ蝶番で開くとか、上下にスライドするとかいう方式ではなくて、空気は入れ換わるけれども暖気は逃げないように、非常に工夫された。ところがそういうのは日本の職人さんは、非常に嫌がる。それで非常に反対が多かったという。ところが慶應の当時の理事たちが「いやそれ、是非やって御覧なさいよ」と。「だめだったらもう一回やり直せばいいから」というふうに、非常にその当時、自分の若い、まだ助教授の頃の自分を励ましてやらせてくれた。そのことに対して谷口先生は非常に慶應義塾に感謝しておられたんですね。そのためにず一っとな戦後、あの大変な時代にもう、材料を工面して色々造ってくださった。そのことは分かってないわけじゃないんでしょうけれども、義塾はもう、谷口さんの苦心作をほとんど全部壊しちゃった。これはねえ、色々な事情があつて仕方がないと思うんですけども、もうちょっとやり方があつたんじゃないかなど。ただ、これ以上私は壊して欲しくないから寄宿舎は、まあ、幼稚舎が壊れちゃうことはないと思いますけれども、何とか谷口先生の代表作を継承していきたい。ただ、谷口先生は大変慶應義塾がお好きだったとみえて、お嬢さんもご子息も義塾で教育を受けていらっしやる。で、まさに谷口先生のご長男ですね、谷口吉生さんっていうのは、これはもう、今、有名な建築家になって、外国でも大変有名で、ニューヨークの近代美術館やなんかも手掛けておられる方です。塾のそこのちょうど後ろっ方に見えるんですが、新図書館というものがございます。それは谷口吉生さんの設計でございます。そんなにいいかどうか私はちょっとよく分からないけれども、とにかく谷口さんは日本の現代建築家としては非常に有名な方でございます。そういうことでもって、谷口さんのお蔭でもって随分義塾は恩恵を受けているわけなんで、これを是非、忘れないように何とか、少しでも歴史のあるものを大切にしていくな心は失わないでいきたいと思ひます。

今日は名講義なんていうものとは程遠い雑談をいたしまして、大変申し訳なかつたんですけど、まあ、名講義をした方の、ちょっと普段の姿というものをお伝えするに留まってしまいました。この貴重なお時間をお出かけくださって、つまらない話を我慢してお聞きくださった方々に本当に私は感謝いたします。今日は本当にありがとうございました。